

大規模水田作経営を実現しながら農地の展望を描く ～西尾のお茶やウナギに並ぶ米や小麦を作る！～

西尾市 小野田裕二さん
作物（稲作・小麦・大豆）

【平成 29 年 2 月 20 日掲載】

西尾市福地地域において、省力・高収量・高品質の大規模水田作経営を実現し、平成26年度農林水産祭天皇杯を受賞された小野田裕二さんをご紹介します。

就農動機は米政策改革と責任感

小野田さんは、地域でも屈指の経営規模を持つ稲作農家の長男でありながら、家業を継ぐつもりはまったくなく、平成2年に地元の消防本部に就職し、農業より異業種の人とばかり交流していたそうです。このような中、平成9年に、翌年度から始まる「緊急生産調整推進対策」において、米から小麦・大豆への転作を助長する策が実施されることになりました。福地地域では、この政策に地域全体で取り組むために、各農家が耕作面積の3割超を転作する取り決めとなりました。当時、小野田家は55haの水田を管理しており、その3割超を小麦や大豆に置き換えることは、農業機械や雇用の面で困難でした。「裕二が継ぐことはないだろうし、規模縮小するしかない」とご両親が話し合っているのを聞いた小野田さんは、毎晩眠れないほど悩んだそうです。職場の上司にも相談した上で、平成10年3月末に退職し、4月に28歳で就農しました。当時を振り返り、「父が築いた経営と農地を引き継がなければならないという責任感しかなかった」と話してくださいました。



小野田裕二さん

就農してすぐ参加した4Hクラブで衝撃！

就農してすぐ西尾4Hクラブに誘われ、参加した会合で大変な衝撃を受けます。自分はもう28歳なのに、10歳近く若いクラブ員たちが話している内容がわかりませんでした。専門用語はもちろん、農作業や栽培に関すること、地域のことなど、何もかもがわからず、話題についていけなかった小野田さんは、この時、農業に対するスイッチが入ったそうです。まずは自分の家の仕事をがむしゃらに学び、就農して3年が過ぎたころには、全ての作業に主力として入れるようになりました。さらに、作業手順の改善や、使い勝手の悪い農業機械などの改良が面白くなり、どんどん実践しました。就農前に異業種の人と交流してきたことが作業改善に非常に役に立ったそうです。父は、経営に関することには厳しい人でしたが、「仕事のやり方は好きにきなさい」と、小野田さんが試行錯誤することに理解がありました。



排水対策の省力化のため
播種機を改良

更なる米政策改革と小野田家の危機

平成 16 年に「水田農業構造改革対策」が始まり、利用権設定による受託の面積が増え、転作がさらに進められました。福地地域でも、小野田さんを始め多くの水田作農家が受託面積を増やしており、地主に委託先として選んでもらうため、各農家がライバルとして切磋琢磨していたそうです。そのような中、経営面積が 120ha まで順調に増えていた平成 19 年、父が急逝します。仕事だけでなく生活の基準となっていた父が亡くなってから、小野田さんは大きなショックと不安な思いから体調を崩すことが多くなり、3 年間ぐらいいは記憶がないとおっしゃるほどでした。仕事の方は、雇用体制ができておらず、経理も引き継いでおらず、地域の活動なども知らないことが多く、無我夢中でこなしていく毎日でした。

「きぬあかり」との出会い、規模拡大、そして天皇杯

平成 21 年産、22 年産小麦作において、のちに「きぬあかり」となる新系統の現地試験栽培に参加し、23 年産から本格的に栽培を開始しました。過湿に強く、高収量が得られるこの品種に出会ったところから、農薬散布用無人ヘリや耕起・施肥・播種同時作業技術の導入、年間雇用の増員など様々な取組を同時並行で展開していきました。経営面積が 159ha にまで増え、小麦の単収が飛躍的に向上した平成 25 年、これらの取組が評価され、麦作共励会において農林水産大臣賞に選ばれ、その翌年に天皇杯を受賞します。「当時は次々に起こることに対応するのが精一杯で、天皇杯受賞はまるで他人事のような感覚だった。受賞後に管外の生産者から声をかけてもらう機会が増えるなど、最近になってようやく実感できるようになった」と話してくださいました。



「きぬあかり」ほ場における無人ヘリによる農薬散布

地域の農地を守るためにやるべきこと

「農業は他の産業より早いスパンで変わってきている」という小野田さん。3～5年の間隔で変化する政策や状況に対応してきた小野田さんですが、最近特に心配している変化が、利用権設定で受託している土地の地主の世代交代だそうです。これまでは、預かった農地をきれいに管理することで、地主の方も農地の保持に協力してくれましたが、地主の世代交代により、農地を手放して宅地化するケースなどが増えてきました。「物理的に農地を管理するだけの時代は終わった。地元でいい物が穫れたり、自分の農地で地元ブランドが栽培されているという精神的な満足感が必要になってきている。行政も市民も、農地から気持ちが離れていくと廃れるだけ。住民みんなが地域の農地の展望を描ける状況にならなければ、この地域の農業は発展していかない。」と危機感を募らせます。



マルシェ等で使用しているのぼり

この考えに基づき、現在は、小麦だけでなく、大豆や水稻の品質の向上に取り組むとともに、米や小麦のブランド化について考えています。自分の生産物をマルシェ等に出品する試みを始め、「西尾のお茶やウナギに並ぶ、市民が自慢に思えるような米や小麦を作りたい。」と話す小野田さん。地域の農地の将来を見据えた取組に今後も目が離せません。

執筆：農業経営課

取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課